

記号過程の時間的アーキテクチャ：ベルクソン記号論へ

平井靖史（慶應義塾大学）

発表要旨：

本発表は、記号作用が成立するための時間的アーキテクチャを解明することを目指し、**マルチ時間スケール（MTS）記号論**の枠組みを提示するものである。

まず、パースが「習慣（habit）」と呼んだ符号規則の安定性を、ベルクソンの運動記憶論に依拠しつつ検討する（Bergson 1896）。ベルクソンの運動記憶は、個々の感覚運動作用を制約する独自の「**ランドスケープ**」を形成し、適応の時間的アウトソーシングとして機能する（平井 2022; Taniguchi et al. 2025）。このランドスケープは、その相対的に**遅い時間特性**によって現在の運動認知の時間窓を安定化させ、記号使用という瞬間的なインスタンスが繰り返し成立し得るための安定的な時間基盤（規範）を提供する。

このランドスケープの安定性は、記号解釈におけるアブダクティブ（仮說的）な推論を可能にすることにも貢献しうる。同一記号群から論理的に考えられる解釈の可能性空間が広大である場合に、ランドスケープが社会や文脈、言語に応じて局所的偏りを提供することで、わずかな手がかりからでも妥当とみなされる意味推定が可能となる。この意味生成のプロセス、すなわちトップダウン的に想定される観念（仮説）とボトムアップ的に与えられる記号的ヒントとの擦り合わせは、書く行為にも読む行為にも共通して前提とされるとベルクソンは論じた（Bergson 1896; 1919; 1972）。本稿ではこの飛躍的推論の度に働くメカニズムを、ベルクソンのいう「**縦の平面の移行**」——多層の潜在空間間を変換しながら進むモデル——に基づき（Bergson, 1919）、MTS 記号論において「**折り合いモデル**」と呼ぶ（平井 2022, 130）。潜在空間自体も複数のレイヤーから成り、各レイヤー間の変換ルールはその都度の新たな層発生を伴うため、トップダウンだけでもボトムアップだけでも意味は決定されず、両者の折り合い（未完了アспект）が不可欠となる。

さらに発表では、書き言葉の導入による記号課程の時間構造の変容についても MTS の観点から考察する。ここでは、書く営み（「言語」への入力）と読む営み（出力）の間に大きな時間的隔たりが生じる。入力と出力が時間的に迂回されたまま保持・参照されることが文字記号体系の継続的な安定性にもたらす意味を考察したい。本研究は、記号学の理論的地平を時間論の視座から再構築する試みである。

参考文献

- Bergson, H. (1896). *Matière et Mémoire* (ベルクソン『物質と記憶』)
- Bergson, H. (1919). *L'Énergie spirituelle* (ベルクソン『精神のエネルギー』)
- Bergson, H. (1972). *Mélanges* (1906–07 コレージュ・ド・フランス講義「意志の理論」)
- 平井靖史(2022). 『世界は時間でできている ベルクソン時間哲学入門』青土社
- Taniguchi, T., Hirai, Y., Suzuki, M., Murata, S., Horii, T., & Tanaka, K. (n.d.). System 0/1/2/3: Quad-process theory for multi-timescale embodied collective cognitive systems. arXiv:2503.06138
- Peirce, C. S. (1931-1958). *Collected Papers of Charles Sanders Peirce* (8 vols.). (C. Hartshorne, P. Weiss, & A. W. Burks, Eds.). Harvard University Press.